巻頭のことば

『教育学研究室紀要』の第 10 号には、2012 年 1 月～2013 年 3 月までの院生や卒研生を中心とした教育学研究室の研究活動報告と卒業生も含めたゼミ参加者の論文、研究ノート、研究動向、施策提案等が掲載されている。本号は博士 1 年の田中和江が中心となって編集をすすめた。

教育学研究室は、昨年3月に橋本が代表の日本学術振興会科学研究費研究（2009－2011年度「子どものジェンダー平等意識形成と学校に関する総合的研究－戦後男女共学制の総括－」）の3年プロジェクトを終え、その報告書を作成した。この3年間に膨大な資料を収集し、多くのインタビュー調査をこなしたが、この、整理と資料集作成等を3月～4月にかけて行った。これには、この科研の遂行のための要員として採用された、特別研究員の茂木輝順が中心的な役割を果たした。8月の日本教育学会第71回大会でその一部「男女共学制が戦後の日本人のジェンダー平等意識・人間形成に及ぼした影響－世代別インタビュー調査を中心に－」を発表したが、この課題の追求は現在も継続しており、本号にも論文や研究ノートとして反映されている。

この間、2012 年 3 月に森友里奈が、9 月に長期履修生であった榎村裕子が修士課程を修了し、4 月に澤村文香が、10 月に田中和江が博士課程に進学してきた。澤村文香や現在、博士論文作成中の丸井淑美も含め、かつての、院生たちの研究活動と比べたとき、現職を持ちながらの研究活動の大変さが伺われる。本号には澤村の研究成果は反映されていないが、彼女は仕事と研究の両立に果敢に挑戦し、修士論文を学会誌に投稿・受理されている。

本号掲載の諸論考は、これらの院生の研究活動や科学研究費による研究などを反映したものであるが、内外の学会誌に投稿できるほどに、十分練られたものにはなっていない。前号の巻頭でも述べた、研究成果をまとめ、発表していくための時間の確保は依然として課題であり、その点を意識して新年度の研究活動を進めていきたい。

橋本 紀子